

(19) 美の感情（「或る反時代的人間の偵察行」の19）

われわれの「美の感情(Gefühl des Schönen)」ほど、制約され、制限されているものはない。「美の感情」は「人間の人間における快感(die Lust des Menschen am Menschen)」に根拠をもつ。「美そのもの(Das „Schöne an sich“)」というのは「言葉」に過ぎず、「概念」ではない。「美」においては「完全性の尺度」は人間自身である。人間は世界が「美」に埋まっていると思っているが、その原因としての自分を忘れている。人間のみが世界に「美」を送り届けているが、それは極めて「人間的な余りに人間的な美」である。根本においては人間が事物に自己を映し、その姿を投げ返すすべてのものを「美」とみなすのである。「美しい」という判断は人間という「種族の虚栄心(Gattungs-Eitelkeit)」である。

(20) 「醜い」ということ（「或る反時代的人間の偵察行」の19）

「何もかも美しいものはない。人間のみが美しい」という「素朴さ」が美学の「第一の真理」である。それに加えるに「第二の真理」は「頹廢する人間より醜いものはない」である。生理学的に検証し直すならば、あらゆる「醜いもの」は人間を「弱め、心を暗くする」。「醜いもの」は人間に「衰微、危険、無力」を思い出させ、実際それによって人間は「力」を失う。「力の感情、力への意志、勇気、誇り」は「醜いもの」によって下降し、「美しいもの」によって上昇する。「醜いもの」は「頹廢の合図にして象徴」である。

(21) ショーペンハウアー（「或る反時代的人間の偵察行」の21）

ショーペンハウアーは考慮されるべき「最後のドイツ人」である。彼は、ゲーテやヘーゲルやハインリッヒ・ハイネと同様に「ヨーロッパ的出来事」である。そして、彼は心理学者にとっては「第一級の症例」である。すなわち、彼は「生の虚無的総引き下げ」のために、その反対の「生への意志」の「大いなる自己肯定」や「生の過剰形態」を持ち出すという「悪意のある天才的試み」を行っている。彼は最終的にはすべてを「意志の否定の続発現象」として解釈するが、これは歴史上稀な「最大の心理学的偽造」である。しかし、綿密に見れば彼はキリスト教的解釈の相続者に過ぎない。彼は「キリスト教によって拒絶されたもの」を「キリスト教的、すなわち虚無的意味」において是認することができたのである。

(22) ショーペンハウアーの美（「或る反時代的人間の偵察行」の22）

ショーペンハウアーにとって「美」は数瞬間の「意志からの解放」である。彼は、特に「美」を「意志の焦点」である「性欲からの解放者」と讃え、「美」のうちで「生殖衝動」が否定されていると見る。彼は「奇妙な聖者」である。ところで「自然」は彼に反論している。すなわち、「自然」のうちには「音、色、香、律動的動き」がある。それらが「美」を駆り立てている。かの神的プラトンも、あらゆる「美」が「生殖」を刺激すること、そしてこのことが「美」の「効果の特質」であると言っている。